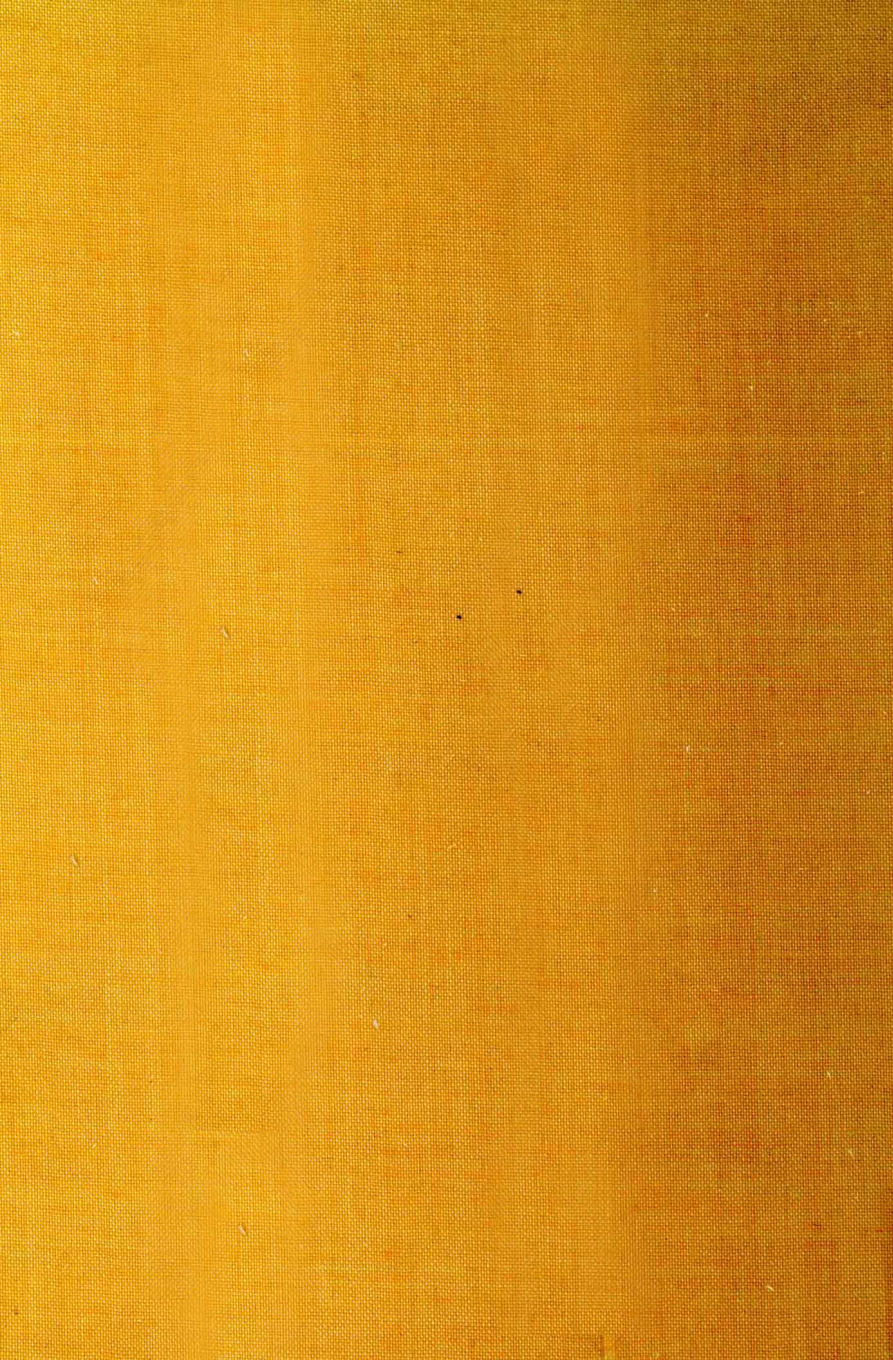




素顔の山本周五郎

木村久 邁典



新潮社版

著者略歴

1923年生れ。

中央大学法学部卒。

朝日新聞東京本社編集局勤務。

著書に『人間 山本周五郎』がある。

現住所 鎌倉市鎌倉山1681



素顔の山本周五郎

昭和45年2月20日印刷

昭和45年2月25日発行

定 価 520 円

著 者 木 村 久邇典

発行者 佐 藤 亮 一

印 刷 光邦印刷株式会社

製 本 神田加藤製本所

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町71

郵便番号 162

電話東京 (03) 260-1111

振替東京 808番

(乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

© Kuninori Kimura, Printed in Japan, 1970

素顔の山本周五郎
目次

出あい	7	意識的？な食言	72
先生と呼ぶな	12	シークレット日	77
カミさんのいわれ	18	人間ぎらい	83
味噌くさい味噌	23	独演会	89
山上の宴	28	修善寺にて	94
立ちまわり	33	よゝなもの	101
つくり咄	39	甲斐のやまやま	105
旅絵師壽石の系譜	47	かんば沢	109
一流と二流	51	葦崎探訪	116
ライバル	55	ふたつの“みどろ屋敷”	120
前借魔	62	生い立ち	128
自分の条件で	67	西前小学校	133

鳥打帽子と角帯	139	パターンとの闘い	206
骨肉への愛	143	情況より人間を	210
霧笛のまち	150	きみ新聞を買い給え	217
空太鼓	153	オレの不徳	222
テープレコーダー	160	英語つかい	226
北国街道	168	骨壺	231
茶屋酒	173	冥土からの便り	235
火花	177	風流のみち	239
無駄な弾	185	酒みずく	245
当番兵	188	終焉	251
『馬込村』	195	あとがき	257
光秀・鷹山・家康	199		

カバ・扉写真

小島啓佑

素顔の山本周五郎

出 あ い

——とこできみは、どこの生れですか、と山本さんがいった。わたくしは北きた国の名をこたえた。

「北国の——どこかね」と山本さんは重ねて訊きいた。わたくしは北海道で出生したこと。しかし少年時代に両親の故郷である津軽に移住して、母と弟が現在もそこで暮くしていること、などをこたえた。

山本さんはちょっと目を輝かせたようだった。「するときみは、西津軽郡車力村、という村を知ってますか」

わたくしは意外な顔つきをしたにちがいない。本州最北端の鹹しお入り湖……十三潟という霞よに囲まれた寂しいみずうみに臨んだ寒村の名が、はじめて対面した山本さんの口からでようなどとは、思いもかけぬことだったから。

その村へは、わたくしの町を通らなければ行けないこと。日に一往復かせいぜい二往復しかバスの便がないこと、などをわたくしはこたえた。なんでまた車力村の名などをご存じなのですか、とこんどはわたくしのほうから訊いた。

「うむ、ぼくの若いころの友人にね、慶応の医学部を出たのがいるんだ。学校を卒えて群馬だか栃木だかの、つまり東京からあまり遠くない病院へ就職さが決っていたのに、みずから望んで、西津軽郡の、はずれもはずれの車力村の診療所へ赴任していったんです。やつはきつと

失恋でもしてたのに違いない。しかし失恋という痛手をいやすために、東京から思いっきり遠い田舎に新しい生活を求める——というのも、若者のひとつのバイタリティーだ。その男？ええ一、二年そこにおいて東京に帰ってきたが、もともと体が丈夫なほうじゃなくて、数年後に肺結核で死んじまいましたかね」

山本さんはなにかを懐かしむ目の色でつづけた。

「しゃりき村、いかにも北ぐにを思わせるいい名前じゃないの。彼は長い手紙をなん通か書いてよこした、村の家々は海から吹きつける強い風をさけるためか、体をかがめるように軒がひくいし、屋根を風に飛ばされないように、どこの家も申合せたように石をのせている——っていうんだな。一度は行ってみたいと思っているところなんです」

わたくしは、その村の分教場に弟がつとめていたこと。早起きの母は、夏など朝早くに縁側の戸をあけはなってしまう。生徒たちは始業の一時間もまゑに登校してきて分教場に隣合せている教員住宅のまわりで遊んでいるが、ねぼすけの弟の部屋にはいあがってきて、「先生ッ起きへ」などといってまだ寝ている弟の足をひっぱったりする、という話をした。

「北ぐにはいいな、わたしは南国よりも北ぐにが好きだ。なり物の豊富な土地は人間を怠惰にする。凜冽な風土に耐えてなにかを生みだそうとするのが人間の努力というものなんです。北欧と南欧の文字を比較すれば一目瞭然じゃないですか」と山本さんはいった。

「ぼくはきょう、きみに会って津軽衆というものの二つの型を発見したな、ぼくには不思議なことに津軽の友人が多いんです。そいつらはみんないけない。なかには国画会の会員で版画をやっているS・Kというのがある。ぼくもかなり酒のいけるほうだが、S・Kというのも相当のむ。ぼくが大森の馬込にいた時分、戦争の末期には酒がなかなか手にはいらなくなった。そ

れで、ほうぼうにクチをかけてたのんでおいたら、某日、S・Kがさるところから入手したといつて、一升壺^{びん}をもつてあらわれた。そいつはどうもありがとう、値段はいくら？　ってきくと、やつは当時としても、かなり高いヤミ相場の倍ぐらいの額を云った。もちろんぼくが断わるわけがない。戦争中、ぼくは割りかたリッチだったしね。あのころがいちばんぼくのお金持だった時分じゃないかしらん。なにしろ酒もたばこも配給だし、飲み屋もバーも自粛営業、そして次第に廃業するものがふえて、だからお金の使いようがない。S・Kが吹つけたことはピンと来たが、そのくらいでよろしくぼくではない。すぐに、どうも有難うといって払った。ところがかの版画家がジロツと一升壺を睨^{にら}みながらいうんだ。『おーいヤマさん、まさか、そいつをそのまま置いて帰ってんじゃないだろうな』おれはこの野郎と思ったが、そう云われちゃあこっちの負けだ。『もちろんだ、ここであけよう』って答えると、やつは待ってましたとばかり、茶わんについで、あんなのを目にもとまらぬ速さ、とても云うんだろう、コクコクコクッと吞^くんじまやがった。またある時は、おれの家にあらわれて、おれのことをて、つべん皮肉な目つきで『ヘッ、このなまだらもの！』っていうんだ。ぼくも毒舌にかけてはヒケを取らないつもりだが、あの男の舌端には本質的な毒があるという感じで、とてもかなわないと知ったね。なまだらものって言葉はどこの言葉なんだろう、津軽弁のなかにでもあるんですか。S・Kのごとき、てめえがなまだら者のくせして……ああいうタチのわるいタイプがひとつ。もうひとつは葛西善蔵や太宰治型。人なつっこくて、シャイで、それでいて闊達^{かつたつ}で、都会人で洒脱でユーモラスなタイプだな。そういう型があるというのに、いま気づいたんだ。わたしは若い時分から葛西善蔵が好きで、日本の現代文学はあまり読んだことがないのに、葛西だけは何度か読み返した。戦後、この本牧に移ってきてからも『子をつれて』や『血を吐く』『湖畔手

『記』『椎の若葉』などを読んで、いま初めてこれらの作品に接したかのような斬新な感動にとらえられたものです。《はアカメない》と訴える子供の声は私の胸に錐をさす。《湯の湖は、これからの永い冬を思ひ侘びるかのやうに、凝然と、冷めたく堪へてゐた》という描写の巧みさ、《椎の若葉に光あれ》という感懐などは、読みなおすごとに、意味が深く新鮮になってくる。善蔵は四十三歳で死んだそうだが、四十三といえましょういまごろの、ぼくの年齢だ。つくづく昔のひとは大人だったなあと思うんですよ。それと反対に、若いころは夢中になって読んだのに、年が経つにつれて、全然共鳴しなくなるような作品や作家もある。たとえば西鶴。わたしは一時、西鶴に心酔したことがあった。簡潔な表現の神髄は西鶴にあるとさえ思いこんだことがあった。しかし違う、こんなに再読、三読してみるとあきらかに私の読み違いだった。西鶴の文章は、要するに雑報記事にすぎない。関西人的な文章の体質はたしかに感じられるし、織田作之助なんか、その系譜に数えられる作家が、現在でもでてきてはいるけれども、本質は雑報記事だということに気づいた。近松は本物だが西鶴は一部のひとたちから不当に買われすぎていると、私は思う。

きみ、善蔵はね、いいことを云っているんだ『こころ急ぐ旅ではない』。泡をくったつてはじまらない。ぼくもジツクリやりますよ。ますます脂っこく、もっともっと息の長いものを書く。ぼくは戦前までは、あまりに人間の精神的な面に重点をおきすぎたようだ。人間は精神と同時に肉体の所有者でもある。生殖器の持主であり、放屁もすれば排尿し脱糞もする生き物であることに目をつぶってはならないという大事なことを、戦後になって気がついたんです。どんなに美しい佳人でも便所のない家に住み続けることはできないだろう、醜惡な面も、全部ふくめたものが人間だ。そういう人間に四ツに取組むのが小説だということに気がついたんです。

年にしては遅い発見だといわれるかもしれないが、わたしはオク手のほうだもんだから、そんなことはちっとも気にならない。まあ、ぼちぼちやつくつもりです」

「山本君は酒をのむと乱におよぶへきがありますからねえ、気をつけていったらいいですよ」

そういって、心配そうにアドバイスしてくれたのは日吉早苗さんだった。日吉さんはそのころ藤沢の鶴沼に住んでいたが、戦前は大森の村岡花子さんの持家の住人で、今井達夫氏とともに、山本さんとは親しい仲間づきあいをしていた小説家のひとりであった。

昭和二十二年の七月、わたくしは労働文化社という雑誌・出版社の、駆けだしの編集者だったが、編集長の毛利昇さんにこう指令された。

「山本周五郎さんのところへ、あす朝、寄って来てください。三月からお願ひしている書下ろし小説、どのくらい捗はかどっているか聞いてきてほしいんです。予定通り進んでいれば来月ぐらいには脱稿のはずなんだが、どうも遅筆のひとつらしいのでね。印税は契約のとき三分の一払込んであります。ちょっと変ったひとなんだ。書下ろしですから、印税は一割二分ということに……ってぼくがいったら、山本さんは『イヤ、一割一分でいい。印税を安くした分だけ、本の値段を安くして読者が買い易いようにサービスしてあげて下さい』というんです。印税をつりあげられるのは毎度の経験だが、値切られたっていうのは初めてだなあ」

そのときのゆくたてを思いだしたのか、毛利昇さんは肩をすくめるようにしてひとり笑いをした。「ああ、それから、今後、きみを山本さんの原稿催促係ということにします、ぼくにつかれなくても、ときどきは山本さんの仕事場に寄って督促するようにしてください」

先生と呼ぶな

わたくしはその時分、鎌倉の西御門に住んでいて、東京・芝公園の協同会館にある労働文化社に通っていた。編集長がわたくしを山本さん係に指名したのは、わたくしがたまたま太宰治さんのところなどへ出入りしている文学青年らしいことや、山本さんの住居のある横浜が、わたくしの通勤の途中にあたっていることから、足代も安くつくといった手近な理由によるものだったろうと思う。

意地のわるいほど雲ひとつなく晴れあがった酷暑の日だった。わたくしは編集長がメモ用の紙切れに書いてくれた道順をたよりに、横浜駅前から本牧三溪園行の市電に乗った。二軸四輪の、思いきり小さなボギー車は、あまり整備のよくない軌道を、ときどきいまにも脱線しそうなほど、飛びあがりながらはしった。およそ三十分ゆられて終点についた。おりるとかすかに磯^{いそ}のにおいがした。

山本さんは、お宅のすぐ裏の家の、六帖^{じゅう}間の仕事場で仕事をしていた。

「あら、うちがそのとき洋服を着ていたんですって？」とき、夫人は、わたくしの記憶を訂正されるように云われた。

「うちは洋服なんか着たことがないんですがねえ」つい先日のことである。

いや、わたくしの記憶では、先生はうす茶色の、海軍の防暑服のごとき上衣と半ズボンをはいておられたような気がする。

仕事場の机のまわりにはいっぱい資料がつまれ、あるものはひろげられたままになっていた。それまで作家といっっては太宰さんの、まことにきれいさっぱりと片づいた仕事場のさましか見たことのないわたくしは、「ははあ、これが現代作家と時代作家のちがいだな」と小賢しくも

思いめぐらせたものである。

「先生、それは海軍の——」

とわたくしがいいかけると、山本さんが強い語調でいった。

「木村君、その先生というのはやめてくれませんか、ぼくはきみたちを友人だと思っているし、自分でも精神年齢ではきみたちと同じだと思っているんですから——」

わたくしはすぐに反論した。

「しかし先生。先生というのは、われわれにとっては原稿依頼者によびかける共通の符号のようなもので……。そう思っていたくそう気になさることもないと思うんですが」

山本さんはすぐ話題を転じた。

「するときは海軍ですか、陸軍ですか」

「海軍ですが、戦争末期の、ほんのちょっぴりです、はあ、海軍予備学生でした」

「それはよかった、ぼくは陸軍が好きじゃないんだ。あの汗くさくて皮革かわくさいのにはまったく閉口だ。ぼくはうんと若いころ、日本魂社というところで雑誌記者をしていたことがある。

あるとき秩父宮のことで伺いたいことがあると申込んだら、陸軍のほうからなん月なん日に出頭せよという返事なので、指定のなん連隊だったかへ出かけていったんです。

むこうは時間まで指定してきたくせに三十分まってもだれもこない。そうそう、上等兵ぐらの兵隊が、これ以上濃くはいらないといったような、ものすごく色の黒い番茶をもってあらわれた。自分の目よりも高く盆をさしあげて部屋にはいつてくるので、上の茶わんがいつひっくりかえるかわからない。そんなことまで責任はおえないといった姿勢でこっちへ近づいてくるから、ぼくは思わず逃げの構えになったもんだ。そばに寄られるとその当番兵の汗くさく

って皮革くさいこと。

それから二十分以上たってやっと中尉だかのおつき武官があらわれた。質問項目はあらかじめこちらから差出してある。その中尉が云うんだな『デシカは……』。その、デシカっていうまえに必ず、皮ぐつの踵かかとと踵かかとを音を立てて合わせて、衣紋竹でもツッぱってるような直立不動の姿勢になるんだ『デシカにおかせられてのご日常は……』って調子でね。一条一条、暗誦するように語ってなんとそれが一時間。一時間はよいが、いっとう終りにやつはこういいやがった。『これまで話したことは、一行も記事にしてはならない、オワリ』

無礼というのは、こういうことをいうんじゃないかな」

山本さんの話題はきわめて豊富だったし、言葉だけでなしに、必要なときには必要な身振りも加わるので、より迫真性をました。話術によって相手の反応をみ、そのテーマが散文になるかならないかを確かめてみるといった計算が、いつも無意識に働いているようであった。

「ある陸軍の退役中將で、象の研究の大家という人がいた。面白そうだからインタビュしてみろといわれてその將軍の家へ行ってみた。なるほど凄すごい。玄関へはいるとから象牙細工ぞうげだの象の絵などが壁一面に貼はられている。その中將は、口をきわめて象を賞めたたえるんです。象社会の情誼じやうぎの厚きことはとても人間のそれと比較にもなるものではない、その頭腦の賢明さにおいても、生活能力の旺盛なる点においても、遠く遠く人間の及ぶところではない。人間は象をこそ師表としてあおぐべきなのにこれを捕獲して使役に用い、見世物にまで供しているバカがいる。そんなことでは、かならず象に滅ぼされる日が人類にやってくるにちがいない。すべからく、われわれは一日も早く、象と調和した社会をきぎあげていかなければならない——。真顔でそう云うんだぜ。そしてきみ、女中さんがもってきた手あぶりが見かけないものだった。